

シンポジウム「公私二元論の再考」に参加して

姫岡とし子

言い訳からはじめなければならない。シンポジウム参加記を書く予定などまったくなかったのに、懇親会の終了間際に、主催者の岡野さんに一言感想を述べたところ、原稿を書くよう依頼されてしまった。予定になかっただけに、メモも取っていないし、うろ覚えの記憶だけを頼りに、参加記を書かなければならない。したがって、私の記述がシンポジウムの内容と一致しなかったり、コメンテーターや当日の参加者の発言と重なってしまう可能性があるし、何よりも雑駁なものしか書けないけれども、記憶の新しいうちに感想を記しておきたい。

岡野さんに述べた感想は、「今日の議論は昔、聞いたことがある」というものだった。決して否定的な意味ではない。「なじみのある論点」だったとしても、繰り返しや、やきなおしではもちろんなく、昔はなかった構築論が用いられ、ジェンダーの権力作用を前提としているため、方法論的には新しく、あらたな観点も数多く出され、昔とは異なる今日の到達点から考察されている。いや「昔、聞いたことがある」という表現は、実は適切ではなく、このシンポジウムを聞いて、「かつて私たちがしてきた議論を思い出した」、という方が正確だろう。

ちなみに私は、80年代フェミニズム世代に属している。70年代のウーマンリブも知っているし、フェミニストとしての自己形成はもっと早かったけれども、女性学の興隆を目の当たりにし、フェミニズムの理論的・実践的格闘を共に体験したという意味で、80年代の女性である。その世代が経てきた議論と、当日の報告とが、私の頭のなかでオーバーラップし、過去の営為をふりかえりながら報告を聞いていた。その意味で、このシンポジウムは私にとって非常に刺激的であった。また報告者の正確な年齢はわからないけれども、私よりかなり若いと思われ、しかも国籍も異なる女性たちが、取りあげ方は異なるとはいえ、80年代フェミニズム世代の私たちと同じような課題に取り組んでいることに、取り組まなければならないことに、「敵」の強力を、あらためて実感させられたのである。

このシンポジウムの報告者は直前に福岡で行われた「世界政治学会」のパネリストであると聞いていた私は、政治学者なので理論的な内容だろうと勝手に予測していたが、見事にはずれ、当日の報告は具体的な事例や実践報告が中心だった。理論に導かれているけれども、理論を前面には押し出さず、具体例に即してパワフルに、しかも感性と知性にみちた政治学者の鋭い分析をまじえながらの語りであった。そこで、「オールド？・フェミニスト」である私が、若い人たちの話を聞いて何を思い出し、何を考えたかを軸に参加記を書いてみたい。

公私二元論。フェミニストにとって、このテーマは古くて新しく、第一波フェミニズムの時代から現在にいたるまで、つねに議論の中軸に据えられている。近代社会においては、家族・家内領域が私的領域とされ、公的領域とされた政治的・経済的・市民的領域との間に明確に境界線が引かれ、私的領域が「女性の本性」にかなっているとみなされたがゆえに、女性は、こ

の領域に封じ込められた。公的領域への女性のアクセスが、ある程度可能になった現在でも、私的領域は女性の主な担当領域とされ、しかも公的領域とは非対照的な関係におかれている。だからこそ、公的領域への進出、あるいは私的領域の地位向上、男性の私的領域への参加、公私の境界線の引きなおしなど、さまざま形で女たちはジェンダー間での公私の分離、そのヒエラルヒー的な権力関係に異議申し立てをしてきたし、現在もし続けている。このシンポジウムの報告者もすべて、公／私の壁、公／私の線引きに、さまざまな角度から挑戦し、あるいは公／私の再構築と強化につながる局面を指摘して、二項対立をズラし、攪乱させ、解体していく試みを展開したのである。

最初の報告者であったスウェーデン人のヤンソンさんの「公私二元論に内包される権力概念」の説明、すなわち「国家権力（公的なもの）による個人（私的なもの）への制限、政治的なものとそうでないものとを線引きする権力、女性に対する男性の構造的権力行使を促進する手段、女性の仕事を搾取する手段」は、DVや「愛による女性の無償労働」など第2波フェミニズムのなかであきらかにされてきたものも含めて、目に見えにくい、意識されにくい、放置されやすい巧妙な男性による女性支配の解明に見事に威力を発揮してくれる。

その延長線上に、彼女の報告の主旨であったチャイルドマインダーという仕事をめぐるジレンマがある。「私」を仕事の領域とするチャイルドマインダーの仕事は、一方では公私二元論に対して異議申し立てをしているが、他方で「雇用」と認められるようにするために公／私の区別に敏感になり、結果的にこの境界線を再生産、強化するのである。それどころか、私的領域、あるいは再生産労働と雇用労働のヒエラルヒーも維持される。この例は、労働者として不安定な立場にあるほど、皮肉なことに既存の労働者概念の遵守をせまられ、また労働組合がその強化に一役買って、多様な労働者の多様なニーズには応えてくれないのである。

ヤンソンさんは、チャイルドマインダーという仕事を女性の仕事として語っていた。もちろん彼女が、この仕事を本質的に女性の仕事と考えていないことは明らかで、実際の担い手のほとんどすべてが女性であること、また公私二元論との関係で女性に焦点を合わせて論じただけである。それでも、男性チャイルドマインダーが報告にまったく登場しないこと、あるいは、男性チャイルドマインダーの存在を仮定した問題構成がないこと（討論のさいには話題になり、例外的とはいえ、その存在も確認できた）は、意外であった。「男女平等の模範国スウェーデン」では、男性の育児休暇さえ制度化されているのではなかったのか。この国でも、やはり雇用労働の分野におけるジェンダーによる境界線は堅固に存在しているのか。それではなぜ、男性チャイルドマインダーの雇用の増加を主張しないのか。チャイルドマインダーの男性たちも、女性と同じように公私の線引きに神経質になるのだろうか。

そこで思い出したのが、80年代末の「アグネス論争」である。仕事場に子どもを連れてきたアグネスに対して、「プロなら子どもの存在をちらつかせず仕事をしろ」という批判。母親の顔を見せないようにして、公私の区別を模範的に守って仕事をするチャイルドマインダーと同じではないか。アグネス論争のさいには、フェミニストはむしろアグネスの味方で、「女性、いや人間にとって子どもがいるのは当たり前、子どもの存在がマイナスにならない職場環境の形成を」、そのためには男の働き方を労働の尺度にしてはならない、と「公のあり方」そのものに異議申し立てをした。ネオ・リベラリズムが貫徹する現在、この主張の実現はますます難しく

なっているけれども、重要性は変わらない。

ヤンソンさんの報告では、「デイケアに通うことが子どもにとって最良」など、当局自身が育児のあり方に強く介入していることが示された。まさに、育児や仕事の価値評価は作られる。そうだとすれば、男性の増加によってチャイルドマインダーという仕事に付与される意味合いも変わり、公私の線引きにも変化が生まれるのでは、などと考えたのである。

その背後には、日本と違ってスウェーデンだから、という思いがあるのだが、実現は難しい。

タイのソングサンファンさんは、元アルゼンチン大統領夫人で、大統領以上に国民の人気の高かったエビータ・ペロンの例、さらにタイのタクシン首相（2006年9月にクーデターで失脚）夫人クンジン・ポッチャマンの例を挙げて、公的には権力をもたない彼女たちが、政治家の妻という立場を介して、いかに政治の領域で影響力を発揮していたかについて述べた。

ソングサンファンさんが、この事例をとりあげたのは、男性中心の公私2元論が私たちの生活世界全般をいかに根強く支配しているかを示すためである。政治には「男性的な資質」が要求されるがゆえに、女性は不向きというイメージが作られ、これが強固に作用しているために、女性は排除されるか、あるいは女性が親密な関係を通じて影響を及ぼしても、政治は私的なものではない、という見解ゆえに無視されてしまう。だが、ソングサンファンさんは、実際のアクターは、公私2元論のとなえる分離にはかなってはず、それぞれが境界線をのりこえ、あるときは境界線の示すやり方で、またあるときはこれに反する行為で政治を動かしていることを示した。

かつて「女性は権力とは無縁だった」という解釈に対して、「犯罪の影に女あり」という例も含めて、女は実は影の実力者で、時には歴史を動かすほどの力を発揮していた、という「舞台裏の陰謀説」がフェミニストによって出されたことがある。背後からの操作。しかし、現在は、背後からの操作より、共演というパフォーマンスの方が目立つようになった。それと関連して、報告の最中、ふと、NHKの大河ドラマで放映中の山内一豊の妻千代のことを頭に浮かんだ。千代がいなければ、一豊は城持ち大名にはならなかった。千代は、得意の裁縫を通じての社交術はもとより、政治のこと、あるいは軍事作戦にまで頭がまわったという。この千代は長い間、内助の功の鏡として語られ、その場合には、夫の出世は妻しだい、夫に尽くせ、とあくまで夫中心の見方が支配していた。だからこそ、千代は「内助」の範疇に入れられたのである。しかし、最近、この男性中心説は再解釈された。中世史研究者の田端泰子さんによると、内助ではなく、戦国の世では女は男とともに互いに助け合って家を盛り立てる共同経営者で、妻が影響力を発揮できる余地があった、という。女たちが大奥という隔離空間に消えてしまう徳川時代とは、違うのである。

ポッチャマンの例は、社会的活動はするけれども、女性の領域をこえないアメリカ大統領の妻や、まして小泉元首相の秘書である姉のように黒子に徹するケースとは違う。千代や、大統領候補にあげられるヒラリー・クリントンの場合に近い。しかし、私は、「親密な回路を通じて」というところにはひっかかりを感じてしまうのである。「ある立場にいる」という偶然に左右される要素が強すぎからで、女性自身が直接に選ばれて力を発揮してほしという気持ち強い。

こうした発想をしてしまうのは、私自身が男性中心の枠組みに拘泥されているからだろうか。実際、男性のなかにも、さまざまな個人的回路を通じて影響力を発揮している人がいるのに、

こちらは当然のこのように思われ、女性だと「領域侵犯」になり、公私の壁がたちはだかる。いずれにせよ現在は女性が、女性単独ではもちろん、男性との共演や共同経営、その他もろもろの形で能力と影響力を発揮できる場を得ることが重要で、それがソングサンファンさんのいう公私の2項対立や、それに付随して構築されているさまざまな概念の見直しにもつながっていくと思う。

最後の香港大学のアイリーン・トンさんは、現在の経済システムによる労働評価とは異なる価値観を実践する地域通貨運動について述べた。ここでは、あらゆる労働が時間で評価され、自分が地域共同体のために費やした労働時間を、他人の同じ時間の労働と交換できる。家事など、女性が行う労働は、男性が行う「専門的労働」に対して非常に低い評価しか受けていないけれども、それは労働の評価システムにジェンダーの権力関係が内包されているからである。あらゆる労働が対等に評価される地域通貨運動は、女性を勇気づけ、意思決定への参加を通じて「女性に欠ける」と考えられがちな能力の伸張の機会も与えられる。公私2元論への挑戦であり、現行の主流エコノミーに対するオルタナティブの実践である。

ここで思い出したのは、歴史研究者として私自身がたどってきた女性史の歩みとジェンダー史への転換の過程である。かつて新しい女性史は、女性を歴史の被害者とみなすのではなく、推進主体と捉え、女性を可視化し、その営みを記述するために、それまでの男性中心の歴史記述では光が当てられなかった女性の居場所に注目するとともに、男性中心の既存の概念把握に再考をせまり、一般史の書き換えをめざした。そして、非常に多くの女性の歴史が書かれたけれども、それによって一般史はほとんど影響を受けることなく、「女性のことは女性史でどうぞ」とばかりに、女性史はゲットー化してしまった。そこで、女性の状況の記述ではなく、ジェンダーの差異化の過程に焦点を当て、公私の分離、労働、福祉、家族はもとより、政治、経済、軍隊、戦争など女性が少ない場所においても、ジェンダーの差異化とその帰結について問い、あらゆる分野でいかにジェンダーが組み込まれて歴史形成が行われているかを解き明かしている。

地域研究通貨運動は、既存の価値体系へのオルタナティブではあるが、主流エコノミーに打撃を与えることはできるのか。主流は無傷なまま、ますますその価値を増殖させ、その傍らでゲットー的に運動を展開しているだけではないのか。新しい女性史がそうだったように、主流のなかに入り込まないと、そして主流のなかで内包されている権力作用にメスを入れない限り、マイノリティーの自己満足に終わってしまうのではないか。

しかし、新しい女性史は、ジェンダー史以上に女性たちを元気にしてくれた。歴史学が作った「受身の被害者」という女性像から解放されて、自分たちを歴史の担い手と認識できたのである。だから新しい女性史は、幅広い書き手と読み手を獲得し、「女であること」の意味を問い直し、「女性主体」の確立を促進することになった。

地域通貨運動も、確実に女性のエンパワメントにつながっていく。自分を自己肯定的に捉え、自分に自信をもち、人とのつながりが獲得できる。すでに専門職についている人も男性も、この輪のなかで自身を相対化する機会を与えられる。そして、労働の格付けが、どのようにメカニズムで行われているのかを説得的に示してもらうことができる。実際、女性たちのアンペイドワークについての主張が認められて、国連における労働の評価も変わってきたではないか。

権力作用を暴くことも重要だけれども、エンパワメントの積み重ねなしには、変革は不可能なのだ。

そして、もっと重要なのは、変革の方向性である。「弱者のパワー」。これがシンポジウムの締めくくりの言葉である。30年前、ほとんどの女性は弱者だった。女性の視点について語るとは、弱者の視点について語ることだった。そして、今、多くの女性たちが強者の世界への進出を果たし、強者の場所から発言するようになった。しかし、強者の場所にいることと、強者の立場に立つことは違う。フェミニズムの強みは、弱者の立場を熟知していることで、弱者の声を反映することこそフェミニズムの目的であるはずだ。公私2元論が女性、そして男性の活動を規定し、制限する、その方法は歴史とともに変化しているけれども、これが私たちにとって依然として大きな桎梏であることは疑いない。強者の場所にいる女性たちは、強者の立場で公／私を強化するのではなく、公私を解体するために尽力してほしいと願っている。（2006年7月執筆）

